造業を主導部門とする工業化の趨勢過程に対応していたことが指摘される。

Vにおいてはゲルシェンクロンの「後進国の工業化は，初期大スパートを通じてのみ，持続的成長に成功する」いう命題に依りつつ，日本のスパートを分析しようとする。そして1913–18年，1932–37年，1956–62年の3つのスパートがくり返し起ったことに注目する。一言だけコメントすれば著者は日露戦争前後の高い投資のピークをスパートのうちに加えていない。それは「近代部門の拡大・成長がなお強く在来部門に依存した」「初期局面」(p. 118)ととらえられる。この見方については評者はやや明治期の成長を軽視しすぎてはいないのかという疑問を抱かざるをえない。

VIにおいては分配率を資本蓄積に関連づけて考える。すなわち，分配率(β)＝資本係数(σ)×投入要素比率(π)，π＝(賃金支払総額÷資本ストック)，資本収益率＝$(1/\sigma)-\pi$とあらわし，β, σ, πの長期系列が分析される。スパートの時期においてはβは低下し，σも低下する。反対にβははじめは低下だが戦後には増大する。しかしスパートとスパートの間にはβはむしろ上昇し，長期的には安定している。それはスパートの時期に新技術が導入され，それがπの値を低目におさえつつ，収益率を維持してきたからにほかならない。

VIIにおいては個人貯蓄率がスウィングを伴いつつも長期的に上昇してきたことが論証される。そして日本の貯蓄率は所得に対してラッグを伴う関数によってよく説明されるが，それは消費のパターンが在来的要素が濃いということとむすびついている。げんに農家，非農業の業主世帯の貯蓄率は高く，それら世帯の総貯蓄に対する比率はきわめて高いのである。

VIIIでは，上記との関連において「現代インフレーション」の分析が展開される。きわめて簡単にいえば，労働供給が半制限的になってのち，在来部門と近代部門の生産性格差が拡大し，一方賃金の平準化が進んで，両部門の交易条件には逆格差が生ずる。そのことが，「成長に不可欠な製造業雇用の増大が生産性をこえる賃金の上昇なくして達成しえなくなった構造と，そして産業間の生産性上昇率の開差の結合」としての現代インフレーションをうみだす(p. 197)。この章は歴史的な分析が現代の緊急な問題に結びつき，見事な結論的な章をなしているといえよう。XIはこのような問題をふまえた現代物価問題についてのユニークなサーベイである。

以上にみてきたとこから，本書の特色がよみとれよう。ここには，いわゆる「二重構造」についての深い理解をベースとした，日本経済の構造変化の歴史的分析が展開される。しかし，ここでの歴史は単なる史実のつみ重ねではない。歴史的な基礎事実をいわば底流のなかから数量的にさぐり出し，それを現代の日本経済に結びつけようとする試みなのである。著者が敬愛するゲルシェンクロンの業績にみられるような，経済発展の法則性をさぐり出すことを通じて，現代経済の分析にも光をあてようとする努力なのである。

本書は，したがって数多くの仮説にみちみちている。しかし，その仮説は必ず数量的検証をともなって説得力あるものにされているし，著者の構想する巨大なモデルの一つ一つの部分品になっているのである。その全体のモデルは必ずしも本書においても明らかにされてはいないのだが，おぼろ気ながら私たちにもその規模だけは想定できる。著者がその全体像を示される日の近いことをねがってやまない。

すでにみたように，個別的には私にも若干の疑問がないではない。しかしそのような細部の点を別にして，私はこの本の体系的な構想に教えられるところが多かった。

【中村隆英】

川合一郎

『管理通貨と金融資本』

有斐閣　1974.11　294ページ

マルクス経済学における貨幣・信用論研究はいま大きな曲り角にきている。莫大なエネルギーを投入して行なわれたいわゆる「不換銀行券論争」はみるべき成果をあげないまま立消えてしまったし，宇野教授の問題提起にはじまる信用論体系構築の試みは，この分野における『資本論』祖述水準をのりこえ，信用論研究を飛躍的に高めはしたものの，川合教授の適切な表現を用いれば，「水面への展望をもたない深海魚の論争」に低迷している。この低迷状態からの脱出が，マルクス信用論の動態化——産業循環論と信用論との結合——という形で強力におし進められていることは周知の通りであるが，川合教授は，従来のマルクス信用論研究が「現実への上向の媒介環を自ら断つ」にいたった原因は，それが「信用機構の核心部分である信用創造のメカニズム」を説明できない信用本質観に立脚しているために他ならないという立場に立って，多彩なポレミークの形で自らの積極説の展開を本書において試みている。教授の主張は，曲り角

にあるマルクス信用論研究の今後の方向を規定するほどの重みのあるものであって，きわめて注目すべきものである。本稿においては，教授の主張と批判点を要約し，若干の疑問点を提示してみたいと思う。

[1] すでに指摘した通り，本書の最重要論点は，信用創造メカニズムの解明にあるが，それを川合教授は，(1) 信用創造を本質的機能とするものとして銀行信用概念を把握しなおす，(2) 信用創造のメカニズムを再生産論的に明らかにする，の2点から解明する。

川合教授によれば，銀行は自己あての一覧持参人払いの債務証書を貸付け，その債務の支払い(兌換＝現金による引出し)段階で初めて現金が出動する。そして，この兌換の要請をみたすために，銀行は現金預金を集めねばならない。すなわち，教授は，銀行信用の本質を「貸付——兌換」にみる。この銀行信用の現金預金に対する先行性把握は，「預金(現金)——貸付」関係を基軸とする現金貸付説と真向から対立するものであり，それゆえに，川合教授のポレミークは現金貸付説批判に集中する。

現金貸付説は，信用を遊休資金の資本間での相互融通と規定し，銀行の役割は遊休資金の社会的集中とその効率的運用に求める宇野信用論においてばかりでなく，いわゆる「正統」派の信用論においても採用されている「通説」であるが，川合教授はそれを4点にわたって批判する。

1) 現金貸付説は，貸幣(預金)利子率の成立に焦点をあわせているために，信用貨幣の貸出利子率は，預金の融通上での銀行の手数料としてしか理解されない。そうではなく，貸出利子率は商業手形を銀行あての一覧払債務に代置するときの割引料に他ならず，「利子は，銀行券で割引くさいの割引料にひっぱられて，預金を吸引するときに，貸幣利子として成立する。」(100)

2) 現金貸付説では，銀行は貸幣媒介機関としてしか位置づけることができず，信用創造の説明に難点を有する。この立場から信用創造を説明しようとすれば，現金的信用創造論(貸幣の流通速度の制度的上昇による信用創造行為の説明)とならざるをえないが，「商業銀行の信用創造は，いわゆる振替的信用創造であることを本質とする。」(77～8)

3) 現金貸付説は，中央銀行の成立およびそれによる発券独占を説明できないだけでなく，発券独占後の民間銀行の信用創造が，預金の設定＝貸付という形に変質してゆくことが把握されず，それゆえに，現段階で重要な位置をしめる預金通貨を射程外におくことになる。

4) 現金貸付説は，信用創造の水準を規制する(割引率政策，支払準備率操作 etc.)ことによって，現金流通(一般流通)の規模に影響を与える現段階の管理通貨の実態を正しく理解することはできない。

以上の指摘の1つ1つはすでに周知のものであるが，それらを原理的統一的に把握できない根本的欠陥を現金貸出説の銀行信用本質観のなかにみいだし，それを鋭く摘出したのは，まぎれもなく川合教授の功績である。わたくしは現金貸付説の主張者がどのように反論するかに注目したいと考える。

川合教授の信用創造メカニズムの再生産論的解明は，商業流通(中間流通)と一般流通(現金流通)の範疇的区別を始点とし，マクロ的次元での「実現の2重化」を中核として展開される。すなわち，商業流通段階では商品の販売が行なわれたとしても，それは個別資本(ミクロ)の立場での実現完了でしかなく，総資本的あるいは総再生産的(マクロ)には，まだ完了していない。それが完了するのは，最終生産物の実現完了時点，つまり，現金流通の完了時点においてである。中間流通は後から現金流通によって補完されてはじめて社会的妥当性をもつ。そして，川合教授によれば，「中間流通における売買の，最終的実現に対する非完結的・依存的性格こそが，最終実現の時点を支払日とする延払販売，商業信用の契約を自然なものとして成立せしめる再生産的な地盤である。」(88) この視点に立って教授は，垂直的生産工程をもつ単純再生産を仮定し，商業流通は預金通貨で，一般流通は現金通貨で行なわれると単純化したうえで，信用創造係数を以下のように再生産論的に規定する。すなわち，

$$\frac{\text{総流通額(商業流通総額プラス一般流通総額)}}{\text{一般流通総額(現金取引総額)}}$$

$$=\frac{I(C+V+M)+II(C+V+M)}{I(V+M)+II(V+M)}$$

$$=\frac{I(C+V+M)+II(C+V+M)}{II(C+V+M)}$$

$$=1+\frac{I(C+V+M)}{II(C+V+M)}$$

この式の意味するところは，一定額の現金流通は，それにこの係数を乗じただけの総取引を可能にするということである。銀行は予想される現金取引を先取りして，商業流通に対して銀行信用を与えることが，信用創造に他ならないと川合教授は解釈する。いうまでもなく，上の定式は，単純再生産について定式化されたものであり，かつ現金は一般流通後すべて銀行に預金されるという想定になっている。これらはすべてより具体化するべきものである。にもかかわらず，川合教授のこの立論は，従

来切断されていた再生産論と信用論を結びつける結接点を明らかにしたものである。上の定式の最後の式がしめすように，マクロ的にみた信用創造係数は再生産の部門構成に依存する。そして，この部門構成の動態的研究は，最近のわが国における再生産表式分析の中心テーマの1つであって，これらの研究とより具体化された川合教授の信用創造論が成功裏に結びつくことができれば，循環的実現の理論，ひいては，循環的価格変動論にも明るい展望がひらけてくるかもしれない。わたくしには川合教授のこの信用創造係数論が最も示唆的であった。

[2] 以上でのべたように，わたくしは本書の主要論点には基本的に同意するのであるが，若干の論点には疑問がある。ここでは，そのうち，預金論についてだけ指摘しておきたい。

銀行信用の本質を「貸付—兌換」とみる川合教授は，兌換請求に何時でも応じうるために銀行は預金を集めるとされた。問題はこの預金の性格であるが，教授の信用創造係数モデルにおいては，*IIC* に相当する現金を銀行は持っていなければならない。そして，これは教授の説明からも明らかな通り，一般流通に必要な現金の一定部分であり，流通手段としての現金である。これを銀行は預金として保有しなければならない。しかもこれは，個人貯蓄ゼロのもとで存在しなければならぬ預金である。ケインズ流の純計分析では消去されてしまうところの，いわば再生産構造的貯蓄概念がここにはある。またこれは，宇野派の預金＝遊休資金とも異質であることはいうまでもない。

ところが，教授は商業信用論においては，宇野派の遊休資金の相互融通論を肯定されているかの如くである。例えば，教授は，商業信用の連鎖が結成されたときにでも，「発端の資本家が負担した流通期間中の追加資金だけは全体としての負担として残る」と考え，「発端の資本家だけが負う追加資金の負担は，競争による価格の変動によって，資本家全体に平準化される」(88–9) といわれる。この主張自体わたくしには理解できないのであるが，もっと大きな問題点は，銀行信用に対する預金の役割を論ずるときのマクロ的視点がここで見失われていることである。上述のような主張は，個別資本の立場で，しかもその特定の行動様式を仮定しなりかぎり主張できないものだからである。教授が銀行信用における信用創造を論じたと同じマクロの視点にたてば，例えば，一般流通完了時点を支払期限と想定すれば，中間流通全体が商業信用で行なわれるとしても，同一事態を結果する。信用創造が商業流通と一般流通の範疇的区別を基礎にする以上，商業流通の担い手が商業信用であろうと銀行信用であろうと，事態には何ら本質的変化がないことは，川合教授の立論から当然帰結されることではあるまいか。それゆえに，遊休資金論に対する関係が商業信用論と銀行信用論ではくいちがうかにみえる点に疑問が残るのである。

このことは，ひいては，商業信用と銀行信用の関連をどのように考えるべきかという論点に関係してくる。もはや詳論する余裕はないが，わたくしは，商業信用は信用貨幣に対する需要を意味し，銀行はそれを銀行券で割引くという形で，それに対する供給を行なっているのではないかと考えている。そして，銀行貸付が預金の設定という形態で行なわれるようになっても，その背後に，いわば省略された形で，商業手形の割引行為が存在していると考えれば，信用関係を全体として商業流通を基礎にして統一的に理解できるでのはないかと思う。この点については，わたくし自身に理解のたりないところがあるかもしれない。川合教授の御教示がえられれば幸いである。

【高須賀義博】

富沢賢治

『唯物史観と労働運動』

ミネルヴァ書房　1974.10　386ページ

本書は，労働運動論を唯物史観の立場から理論的に基礎づけることを課題とし，唯物史観と労働運動論との関連を，「労働の社会化」という概念を基軸に追求した第1部，資本による労働の社会化の過程と労働運動を論じた第2部，帝国主義段階における労働運動の特質を，主にレーニンに即して追求した第3部からなる。

本書のメリットの1つは，従来スローガンのように言及されることはあっても，深く追求されることのなかった「生産の社会化」，「労働の社会化」，「生産手段の社会化」という概念を，マルクスやレーニンの文献を広く渉猟して克明に追求した点にあると思われるので，この書評では，この問題に関係のある第1部と第2部とを主に取りあげることにしたい。

ところで本書のタイトルにもある「唯物史観」という表現は，著者によると誤りではないにしても，マルクスの立場を正しく表現するものではないという。すべての思想を唯物論と観念論とに2分したのは，エンゲルスで